

平成 28 年 7 月 1 日  
地震調査研究推進本部  
地震調査委員会

## 雨滝一釜戸断層の長期評価

### 1. 断層の位置・形態

雨滝一釜戸（あめだきーかまと）断層は、鳥取県岩美郡岩美町から鳥取市国府町にかけて分布する活断層である（図1）。長さは約13kmで、概ね北西-南東方向に延びる。雨滝一釜戸断層は左横ずれを主体とし、東側隆起の成分を伴う断層である。

### 2. 断層面の地下形状

雨滝一釜戸断層の断層面の長さは、不明である（表1）。断層面の傾斜は、高角（北東傾斜）と推定される。断層面の幅は不明であるが、地震発生層の下限を目安とすると15-20 km程度の可能性がある。

### 3. 過去の断層活動

雨滝一釜戸断層の平均的な横ずれの速度は、0.05m/千年程度と推定される。雨滝一釜戸断層の最新活動時期は約7千6百年前以降、約3千7百年前以前であった可能性もある。平均活動間隔は約2万年程度の可能性がある。

### 4. 活動時の地震規模

雨滝一釜戸断層は、全体が1つの区間として活動する場合、マグニチュード6.7程度の地震が発生する可能性があり、その際には断層近傍の地表に1m程度の横ずれと、断層の東側が西側に対して相対的に高まる段差が生じる可能性がある。

### 5. 地震後経過率（注1）

雨滝一釜戸断層の地震後経過率は、0.2-0.4である可能性もある。

### 6. 今後に向けて

雨滝一釜戸断層については、最新活動を含めた過去の活動について、ほとんどデータが得られていないため、地震後経過率や地震発生確率を評価できていない。よって、過去の活動履歴に結びつく資料を蓄積していく必要がある。

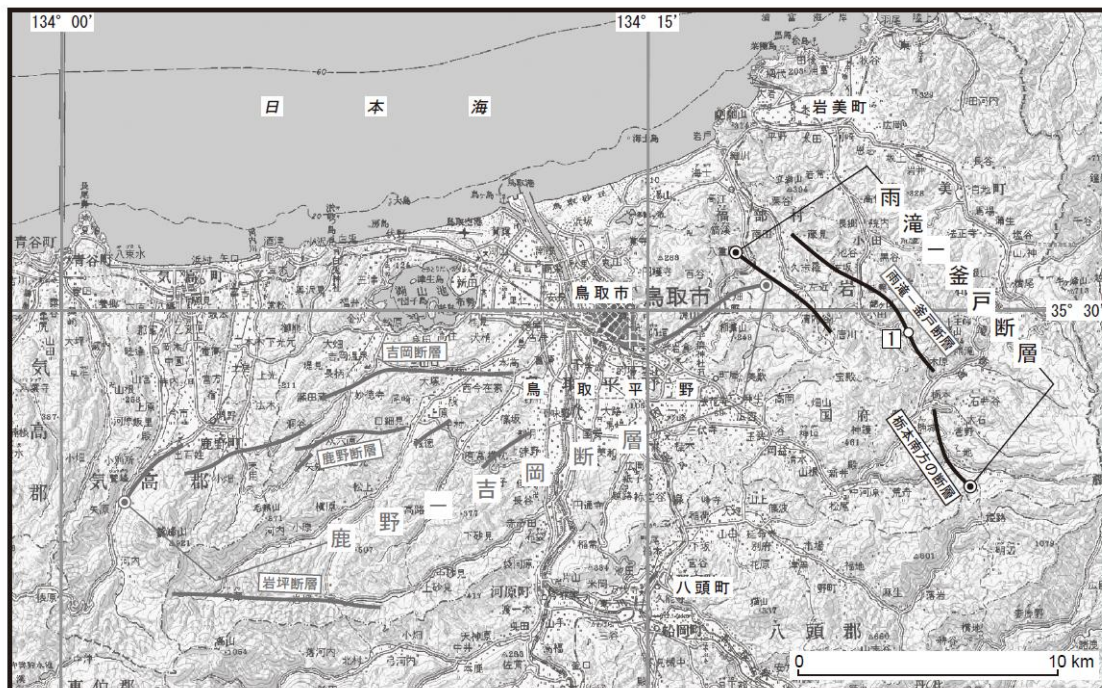


図1 雨滝-釜戸断層の位置

●：断層の端点

○トレンチ調査等の調査地点 1：大坂地点

基図は国土地理院発行数値地図 200000「鳥取」、「松江」

表 1 雨滝－釜戸断層の特性

項目	特性	信頼度 (注2)	根拠 (注3)
1. 断層の位置・形態			
(1) 構成する断層	雨滝－釜戸断層、栃本南方の断層		文献1、2などによる。
(2) 断層の位置・形状	断層の位置 (北端) 北緯35° 31.4' 東経134° 17.1' (南端) 北緯35° 26.5' 東経134° 23.1'  長さ 約13km 一般走向 N45° W	○  ○  ○  ○	文献1、2などによる。    一般走向は断層帯の両端を結んだ方向。
(3) ずれの向きと種類	左横ずれ断層 (東側隆起を伴う)	○	文献1、2の記述などから推定。
2. 断層面の地下形状			
(1) 断層面の傾斜	高角 (北東傾斜)	○	文献2の記述などから推定。
(2) 断層面の幅	上端の深さ 約0 km  下端の深さ 不明  断層面の幅 不明	◎  △	D90による地震発生層の下限深さは15-20 km程度。
(3) 断層面の長さ	不明	—	
3. 断層の過去の活動			
(1) 平均的なずれの速度	0.05m/千年程度 (上下)	○	文献2による。
(2) 過去の活動時期	活動1 (最新活動) : 約7千6百年前以降、約3千7百年	▲	文献2の記述などから推定。

	前以前		
(3) 1回のずれの量	1 m程度 (横ずれ成分)	△	断層の長さから推定。
(4) 平均活動間隔	約2万年程度	△	平均的なずれの速度と1回のずれの量による。
(5) 過去の活動区間	断層全体で1区間	△	断層帯の位置関係・形態等から推定。
4. 活動時の地震規模			
(1) 活動時の地震規模 (注4)	マグニチュード6.7程度	▲	断層の長さから推定。
5. 地震後経過率			
地震後経過率 (注1)	0.2-0.4	▲	

注1：最新活動（地震発生）時期から評価時点までの経過時間を、平均活動間隔で割った値。最新の地震発生時期から評価時点までの経過時間が、平均活動間隔に達すると1.0となる。

注2：信頼度は、特性欄に記載されたデータの相対的な信頼性を表すもので、記号の意味は次のとおり。

◎：高い、○：中程度、△：低い、▲：かなり低い

注3：参考文献

文献1：活断層研究会編（1991）：「新編日本の活断層—分布図と資料」。東京大学出版会，437p.

文献2：鳥取県（1998）：「平成10年度雨滝—釜戸断層系に関する調査成果報告書」。109p.

注4：経験式によれば、活動時の地震規模M（マグニチュード）は、断層の長さL（km）を用いて、 $M = (\log L + 2.9) / 0.6$ と表される。

ただし、長さ20km未満の活断層には適応できない可能性があるため、ここでは信頼度を▲とした。